The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

▶研究論文◀

高校中退者の意識特性に関する分析
——経営学的基礎研究——

大阪大学　榊原　禎宏

1　本研究の課題

高校を中退する生徒が年間11万人を越え，社会問題として注目されるなかで，「高校中退論」は主に2つの論調から構成されてきた。

そのひとつは，高校中退の増加が高校の教育力低下の現れであるとして，中退の原因を高校の置かれた社会的条件やそれに伴う高校の在り方に求めるものである(1)。その原因については，ナショナルレベルの教育政策や都道府県レベルの教育行政施策を指摘する論，校長・教頭等のリーダーシップの問題，学校の管理組織の在り方を挙げる論，あるいは教員の資質や地域社会の変貌に求める論，など多岐にわたっている。同論は，こうした諸条件の中で生徒は不本意にも「自主退学」せざるを得ない状況に置かれており，中退の防止によって彼らの学習権保障を図ることが課題であると主張する。

もうひとつは，社会や学校といった生徒の外側に主因を求めるのではなく，中退を生徒による主体的な選択の結果として，あるいは教師—生徒という関係性の不成立として理解するものである(2)。この論においては，学校に通うことも退学することも生徒の選択行為のひとつであるとし，中退者数の増加は，限られた教育的役割を果たす高校を選ばない生徒が増えたこと，そして学校において前提化されていた「教える」—「学ぶ」という構図が否定されつつあることを意味すると考える。同論は，高校に限らず学校全般の相対化を主張し，学校の独自性と限界を明らかにすることで，多様な機能を担っている学校の役割の明確化，あるいは学校そのものの廃止を志向する。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

以上の諸論を単純化すれば，前者が「望ましくない中退」，後者が「望ましい中退」を指摘する点でそれぞれ特徴づけられるが，このことは，両論においてイメージされている「中退者」が少なからず異なることを意味している。素描すれば，前者は学校という巨大な組織からはじき飛ばされた，弱々しくうつむいた生徒像を前提とするのに対して，後者は自信を持ち，逞しく自らの考える道を歩んでいく生徒を想定しているのである。しかし，中退の原因が様々であるように(3)，実在する中退者は多様であり，決してそのどちらかで理解できるものではない。つまり，先の両論はいずれも高校を中退した生徒の一部を言い当てており，むしろ両論を止揚した，よりトータルな「中退者像」を描けていないことが問題なのである。そして，こうした論理的状況は，「青年期」という発達論的段階に位置する人間が持つ特有の課題に，高校がいかに応えられるのかについての検討を曖昧なままに留めている。

どのような生徒が高校を中退するのか，この問いに答えるために従来いくつかの研究がなされてきた(4)。概括的にいえば，それらは中退した生徒の外的側面への注目を中心的内容としている。先行研究は，中退者の性別，学業成績，家庭の所得水準・職業・居住地域，父母の学歴などを調べることにより，これらのうちのいくつかの条件と中退との相関を一定程度解明してきた。たとえば，家庭に代表される文化的条件が生徒の学業成績に影響を及ぼし，これが中退につながるパターン，また家庭の状況とは別に，学業成績や入学した高校の「ランク」の低さから「問題行動」を伴って中退に至るパターンなどが有力なメカニズムであると分析している。あるいは，中退原因の一般化を避け，中退者との面接調査を中心として個別具体的な中退へのプロセスを追った研究もあり，そこでは「適応」と「逸脱」の概念を軸にした，高校と中退者との関係解明を試みている。

このような研究状況を踏まえて，高校中退者の分析を進めるには，彼らの置かれた外的条件のみならず，彼らがいかなる内的特性を持っているかを明らかにすることが不可欠となっている。それは，中退者の多くは最終的には自らの判断で退学すると考えられ，しかもその理由に経済的困難を挙げる割合が極めて低い現況(5)においては，生徒が自分なりの「自己理解」に立って中退することが十分予想されるからである。すなわち，生徒がいかに自分の現在や将来を考えた上で退学を決意しているのか，そこに中退者の特性を見い出せるのではないかというのが本研究の仮説である。このことは，中退者の一側面としての

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

意識特性を解明することに留まらない。それは，中退問題が学校制度の構造的要因を基底としながらも，高校が生徒の意識を変容させる可能性を持つ点で，彼らの発達的課題を高校がいかに受け止め，これに働きかけることが可能かを探る上で有意義と考えられるのである。

本研究は，「望ましくない中退」の防止を学校経営的にいかに構想するかを展望するための基礎研究であると同時に，「望ましい中退」を描く可能性を持つ点で，高校教育の意義と限界の検討につながるものでもある。

2　調査の方法と分析の視点

本稿では，ある大学区制下の単独選抜制高校（全日制課程普通科・「職業」科）3校の1年生に対して行った悉皆調査データの一部を用いる。同調査[6]は，7領域，計69項目からなる質問紙を，1989年5月下旬から6月中旬にクラス担任教師を通じて配布，回収した（総回収数1243票，回収率93.3%）。調査ではクラス・出席番号を生徒に記入してもらった。そして，1990年3月下旬から4月上旬に各校を訪問し，1989年度内の中退者のクラス・出席番号を尋ねた。ここでは，調査対象のうちの2校である普通科生徒の意識分析を行う。

同2校（計22クラス）では，中間考査終了直後の1989年6月1日および15日に調査を実施し，在籍する1年生の92.4%から回答を得た。同年度内に中退した生徒は総在籍者数の14.1%であり，中退者の44.4%は原級留置決定後の退学となっている。なお，原級留置が決まった生徒の78.3%は中退している。さらに，調査日に欠席した生徒の61.7%は中退しており，分析対象は中退者全体の66.9%に留まる。このように中退者の少なくない部分は6月中旬時点で登校しておらず，調査票による中退研究の限界を示すものともなっている。また，原級留置措置が中退を生むという指摘[7]を確認することもできる。

中退には，一家転居や経済事情の悪化といった家庭の事情，生徒の「問題行動」や「生活の乱れ」，低学力，病気，進路変更，結婚など多様な理由が伴う。しかし，書類上示される中退理由は実際とは異なることがあり，理由に基づく中退者の区分は必ずしも明確ではない。そこで本稿は，質的データに基づく分析の前提的研究として，転校を除く入学後1年以内の退学者を「中退者」と捉えたい。

分析にあたっては，結果として中退に至った生徒を中退群とし，在学を続け

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

る非中退群との比較によって彼らの意識特性を明らかにする。なお，高校入学間もない生徒の意識を対象とすることから，以下では，前年度の原級留置者を除く。また，回答の数値化については，「全く違う」～「全くそうだ」，および「あてはまらない」～「あてはまる」の４つの選択肢の順にそれぞれ１，２，３，４点を配した。そして，質問項目を構成する内容の組み合わせごとに判別分析をおこない，「中退的中率」（回答結果から予想された中退者の，中退者全体に占める割合）の最も高いグループの構成パターン（中退者の76.9％を予想）を選び出した。また，判別分析に不適切な項目については，中退群と非中退群ごとにカイ自乗値，ｔ値等を算出して分析すべき項目を検討した。その結果，高校生活に対する意識と自己評価意識[8]について尋ねた質問グループ（計47項目）による分析が有効であると判断した。質問項目は表１・表２の通りである。以下での分析の視点は，①高校生活に対する意識，②自己評価意識，③両者の関連としての高校生としての自己像についてである。これらの分析を通して，「望ましくない中退」の内実の輪郭を明らかにし，高校として構想しうる経営的条件の仮説的提起を試みたい。

3　中退者の意識特性

(1)　高校生活意識に見られる特性

表３は，表１の４選択肢法での質問への回答を肯定的・否定的に２分したものと，中退群，非中退群に２分したものからできる２×２のクロス集計について，群ごとの肯定的回答率，カイ自乗検定の結果を示したものである。

(6)(7)(9)(14)を除く16項目において，中退群と非中退群の差は大きく，すべてで１％有意もしくは５％有意である。まず，高校での勉学意識を尋ねた(2)(16)(19)については，いずれも非中退群の肯定率が中退群の２倍以上であり，(19)については３倍以上になっている。「とくに先生から言われなくとも，予習や復習を行うようにしたい」に肯定的な回答は，非中退群で過半数であるのに対して，中退群では５人あたり１人に満たない。カイ自乗値については，(2)(19)(16)の順に差が大きく，「好きな科目の勉強」や「予習や復習」といった具体的な勉強をイメージさせる項目への回答ほど両群が異なる傾向にあることがわかる。また，クラブ活動やクラス活動への姿勢を問うた(1)(7)についても，中退群は，非中退群

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

表1　高校生活に対する意識に関する質問項目

(1) 放課後のクラブ活動を，熱心にやりたい。
(2) 好きな科目の勉強は，自分でどんどん進めたい。
(3) 高校生活に，自分なりの目標を持っている。
(4) 何のために高校に行くのか,わからない。
(5) この高校に通うことを，ほこりに思っている。
(6) 友だちとのつき合いを大切にしたい。
(7) クラスのために，文化祭などの行事の計画をすすんでひきうけたい。
(8) 高校生活で熱中できるものなどは，ないと思う。
(9) 自分の趣味のために，できるだけ時間を使いたい。
(10) この高校では，自分は大切にされていないように思う。
(11) 勉強はてきとうにして，学校生活を楽しみたい。
(12) 自分の趣味に使うお金は，自分でアルバイトをしてかせぎたい。
(13) 高校にいくよりも，専修学校に行くか就職した方がよかったと思っている。
(14) この高校の生徒とは，楽しくつき合えない。
(15) 高校を卒業していなければこまるので，しかたなく高校を受験した。
(16) 職業に役立つ技術や知識を得るために，勉強にはげみたい。
(17) 高校に行くことが楽しみである。
(18) 異性とも積極的につきあってみたい。
(19) とくに先生から言われなくとも，予習や復習を行うようにしたい。
(20) もしできることなら，この高校から，転校したい。

表2　自己評価意識に関する質問項目

(1) 自分の力を,できるだけのばせるよう，いろいろなことをやってみたい。
(2) 努力さえすれば,成績はよくなると思う。
(3) 何か新しいことをしようとする時，他の人が反対するのではないかと心配になる。
(4) 将来，りっぱな仕事をしたい。
(5) どんな不幸に出会っても，くじけないだろうと思う。
(6) 他の人から，どんなうわさをされているか，気になる方である。
(7) 自分の理想に向かって，たえず向上していきたい。
(8) 新しいことや,今までとちがうことを，いろいろやってみたい。
(9) 一度自分で決めたことは，とちゅうでいやになってもやり通すよう努力する。
(10) 小さいことを，くよくよと考えることが多い。
(11) 他の人には，できないようなことをやりとげたい。
(12) 何でも，やり始めたことには，できるかぎり力をつくしたい。
(13) 今の自分は，幸せだと思う。
(14) 運にめぐまれれば，力のない人でもえらくなれると思う。
(15) 今のままの自分では，よくないと思うことがよくある。
(16) 人の一生は，あんがい，たまたまのでき事で決まるものだと思う。
(17) 人より，おとっているのではないか，と思うことがよくある。
(18) 将来，他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う。
(19) 自分の心を，きずつけられないかと，よくおそれている。
(20) いまの自分に満足している。
(21) 自分を,たよりないと思うことがある。
(22) 他の人に認められなくても，自分の目標に向かって努力したい。
(23) 自分のいいたいことは,強く言う方である。
(24) 人とうまく,つきあっていける方である。
(25) ときどき,自分がいやになることがある。
(26) 自分が，少しでも人からよく見られたいと，思うことが多い。
(27) “あんなことをしなければよかった”と，くやむことが多い。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

表3　高校生活に対する意識の肯定的回答率（%）

質問項目	中退群	非中退群	カイ自乗検定	質問項目	中退群	非中退群	カイ自乗検定
(1)	20.4	45.8	*	(11)	85.7	67.2	*
(2)	29.6	67.7	*	(12)	89.8	80.7	**
(3)	43.8	58.8	*	(13)	35.1	11.6	*
(4)	56.4	23.4	*	(14)	11.2	8.8	
(5)	31.6	52.6	*	(15)	62.2	34.9	*
(6)	93.9	97.4		(16)	23.7	57.3	*
(7)	21.6	25.4		(17)	31.3	57.8	*
(8)	30.6	20.7	**	(18)	85.7	72.1	*
(9)	75.5	81.8		(19)	17.3	53.9	*
(10)	50.0	25.8	*	(20)	38.8	20.4	*

*　危険率1%以下で有意，　**　危険率5%以下で有意

を下回り，中退者群の学校での諸活動への全体的な否定的意識が認められる。

次に，高校に通うことへの意味づけや意欲に関する項目(3)(4)(5)(10)(13)(15)(17)(20)では，すべてで1%以下の危険率で有意であり，肯定率でも大きな違いがある。これらのうちで，(4)(13)(15)への回答状況はカイ自乗値が25以上と相対的に高く，「何のために高校にいくのか，わからない」「高校にいくよりも，専修学校に行くか就職した方がよかった」「高校を卒業していなければこまるので，しかたなく高校を受験した」といった，無目的的，消極的な高校進学意識が中退群において一層強いことが明らかとなっている。このことは，結果として中退した生徒が，当該校への在学だけでなく，高校に通うことそのものへの不満をより感じていたことを示すものである。

また，(9)(12)(18)では，「自分の趣味のために，できるだけ時間を使いたい」についての肯定率は，非中退群の方が上回るが，それ以外については，中退群の方が高く，中退群における高校外の活動への積極的姿勢が見られる。ここで中退群について，(12)「アルバイト」及び(18)「異性とのつきあい」と，学校での活動である(1)「放課後のクラブ活動」，(2)「好きな科目の勉強」，(7)「クラスでの活動」との計6種類について4選択肢ごとのクロス分析を行うと，うち3種類でカイ自乗検定が1%有意あるいは5%有意となり，なかでも(12)×(1)と(12)×(2)については，明確な負の相関が認められる。つまり，高校でのクラブ活動や勉学に対して否定的な意識を持つ中退者ほどアルバイトへの意欲は高く，高校での不満の裏返しとして学校外のアルバイトを志向するという関係が窺える。

以上，高校生活に関する多くの項目で，中退群と非中退群との意識の違いは

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

明瞭であるが，両者の差が明らかではない項目にも留意しなければならない。(6)(14)への回答に示されるように，友人関係については，両群とも極めて高い割合でこれを重視する傾向にある。「友だちとのつきあいを大切にしたい」の肯定率は95％を越えており，逆に「この高校の生徒とは，楽しくつき合えない」に肯定的な回答は，10％前後に過ぎない。中退群は高校に通うことには消極的，否定的であっても，非中退群と同様，友人とのつきあいは総じて楽しく，またこれを大切にしたいと考える傾向が強いのである。このことは，校内の友人関係によって在学を続ける場合，校内の友人関係にもかかわらず退学する場合，そして，校外の友人関係によって退学する場合のいずれもが想定可能なことを示すものといえよう。

(2) 自己評価意識に見られる特性

ここでは，生徒が自分をいかに理解しているかという，自己評価意識について分析する。個々の項目の検討の前に，項目間の関連が高いグループごとの分類を主成分分析によって試み，固有値１以上を基準とした主成分を７つ抽出した。しかし，これらの累積寄与率は52.8％と低く，また主成分分析は質的分析には適切ではないので，以下ではこの結果を補助的に用いて，関連項目ごとの分析を進める。

表４　自己評価意識に対する肯定的回答率（％）

質問項目	中退群	非中退群	カイ自乗検定	質問項目	中退群	非中退群	カイ自乗検定
(1)	56.1	75.2	*	(15)	68.0	76.2	
(2)	70.4	89.3	*	(16)	64.6	59.1	
(3)	25.8	51.9	*	(17)	55.7	62.7	
(4)	69.1	82.5	*	(18)	21.6	25.1	
(5)	58.2	53.7	**	(19)	33.3	31.7	
(6)	67.0	82.0	*	(20)	29.9	38.9	
(7)	71.4	78.0		(21)	63.9	61.4	
(8)	79.4	86.3	***	(22)	64.9	75.1	**
(9)	50.5	61.5	**	(23)	70.5	46.6	*
(10)	39.8	57.2	*	(24)	77.1	68.3	***
(11)	64.1	73.3	***	(25)	61.9	67.9	
(12)	61.9	82.2	*	(26)	66.0	71.1	
(13)	64.9	75.1	**	(27)	76.3	77.0	
(14)	77.3	66.4	**				

*　危険率１％以下で有意，　**　危険率５％以下で有意，　***　危険率10％以下で有意

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

表4は，表3と同じく中退群，非中退群ごとの肯定的回答率とカイ自乗検定の結果を示したものである。項目(1)(2)(7)(9)(11)(12)(22)に示される継続的な努力への自己評価については，(7)以外のすべてで危険率10％以下の有意であり，中退群は非中退群よりも，「できるかぎり力をつくしたい」「自分の目標に向かって努力したい」といった持続的な努力向上への姿勢が弱いと自分を捉えていることがわかる。こうした傾向は，学校での勉強に代表される「コツコツと努力する」ことに自分は適応していないと中退群が感じていることの現れであろう。しかし彼らが，(5)「どんな不幸に出会っても，くじけないだろうと思う」を肯定する率は非中退群より高く，他の関係項目にについてもこれを肯定する割合はいずれも過半数を占めている。つまり，非中退群を下回るものの，中退群において努力向上への志向は一定程度あり，中退群の相当数が(7)「自分の理想に向かって，たえず向上していきたい」と考えているのである。継続的な努力志向が中退群においてより低いことは認められるものの，その差は必ずしも大きくないと考えるべきか，あるいは高校入試を通じて成績ごとに「輪切り」される現行制度のもとでは，高校によって明確に回答傾向が異なると見るべきか[9]，ここでの判断は留保される。

次に，(3)(6)(10)(15)(17)に示される，他者からの評価，あるいは現在の自分への不安・懐疑的意識について検討する。「何か新しいことをしようとする時，他の人が反対するのではないかと心配」「他の人から，どんなうわさをされているか気になる」といった，他者の存在を自分の評価に関わらせて捉える傾向は中退群において弱く，いずれも非中退群の肯定率を約20％下回る。逆に，(10)(15)(17)のような劣等感や不安意識については非中退群の方が高く，中退群では「小さいことを，くよくよと考え」たり，「今のままの自分では，良くない」「人より，おとっているのではないか」について肯定する割合がより少ないことがわかる。これらは中退群の自信を示すものでもあるが，そもそも「自己」理解が「他者」の存在を媒介とせずには成立しないことを考えると，彼らにおいては，「意味ある他者」と「自己」との位置関係が不明定だとはいえないだろうか。つまり，こうした自己評価が，「自我」のレベルに留まり，「『自我』のみ肥大化して，『自己』を形成できずにいる」[10]ことに起因しているのではないだろうか。

この点については，(23)「自分のいいたいことは，強く言う方である」への肯定的回答率の差（1％有意）からも読み取ることができる。中退群は非中退群と較べて24.1％も肯定率が高く，しかも「あてはまる」という強い肯定的回答

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

は，全体の50.8％となっている。非中退群の肯定率は半数に満たず，「あてはまらない」は中退群が0.2％であるのに対して，非中退群は14.9％である。さらに，①自己内省と自己主張，②自己内省と努力向上に関する質問項目への回答状況を調べると，計40種類のクロス集計の結果，①において前者が否定的かつ後者が肯定的な回答は，全体の平均で中退群36.0％，非中退群17.0％であり，②において前者，後者ともに否定的な回答は，それぞれ20.6％，8.4％である。①では自己内省が弱く，自己主張の強い割合，②では自己内省が弱く，努力向上の弱い割合，のいずれもが中退群に多く見られることがわかる。つまり，中退群における自己主張志向は，必ずしも自己内での問いかけを経たものでなく，また自己内省が弱く，さらに努力向上への姿勢が不明確なままという性格を帯びているのである。

このように，彼らにおいては，「自分の社会的位置に関する自覚」[11]が希薄とされる「『自己』主張」の傾向がより強い。同様の指摘[12]はケース研究においても報告されており，彼らの決断による中退がより適切な判断に基づくものであるか否かが問われている。なお，⒀⒇㉔に見られるように，中退群は「自己主張」志向に加えて，人とのつき合いにも自信をもっているが，「今の自分は幸せだと思う」幸福感は薄く，満足感も少ない。

(3) 高校生としての自己像――中退者にとっての高校生活――

(2)では，中退群の意識特性を検討するうえで，継続的な努力志向，自己内省，自己主張の３つが指標となることを明らかにした。また，中退者の高校生活に対する意識については，(1)において，勉学等の高校での活動への姿勢，高校在学への目的意識性，高校外活動への姿勢の３つにおいて，非中退群との差が顕著であることを述べてきた。では，これら高校生活への姿勢と自己評価意識の特質は，中退群にあっていかに関連しているのだろうか。

表５は，高校生活への意識と自己評価意識のクロス集計をまとめたものである。同表は，各群に該当する項目間のクロス分析を行い，中退群，非中退群の各実数を算出，そして各セルについて，全体数のうち中退者の占める割合を中退者の出現率として，その平均を回答パターンごとの中退者率としてまとめたものである。各パターンは，各々のカテゴリーの肯定的回答・否定的回答の組み合わせを示している。ただし，項目(4)⒀⒂については内容として在学否定的な意識を尋ねているので，ここでは操作的に肯定・否定の回答を反対に扱って

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

表5　高校生活に対する意識と自己評価意識の関連

	高校生活に対する意識［項目番号］ × 自己評価意識［項目番号］	回答パターン	(+)×(+)	(+)×(−)	(−)×(+)	(−)×(−)	平均中退者率
①	勉学・教科外活動積極的(1)(2)(7)(16)(19) × 継続的努力志向(1)(2)(7)(9)(11)(12)(22)	中退者率	4.1%	6.8%	12.3%	17.9%	9.5%
②	高校在学目的意識的(3)(4)(13)(15) × 自己内省志向(3)(6)(10)(15)(17)	中退者率	5.5%	8.5%	12.0%	24.8%	9.5%
③	高校外活動積極的(12)(18) × 自己主張(23)	中退者率	14.9%	6.3%	8.6%	2.7%	9.4%

(+)……肯定的回答，(−)……否定的回答

いる。

まず，「勉学・教科外活動積極的」と「継続的努力志向」では，5項目×7項目，計35種類のクロス集計を行ったが，最も高い中退者率は共に否定的な回答群において17.9%と，平均の約2倍を示している。反対に最も中退者率の低いパターンは，共に肯定的な回答群の4.1%となっており，その差は4倍以上である。学校での諸活動に消極的で持続的な努力に否定的な回答群に中退者は最も多くみられ，それぞれが逆の傾向の場合に，中退者が最も少ない。

また「高校在学目的意識的」と「自己内省志向」では，4項目×5項目，計20種類のクロス集計を行った。中退者率は，共に否定的な回答群において24.8%と極めて高い出現率であり，いずれも肯定的な回答群5.5%と比較するとその4倍以上，平均中退者率の約2.6倍に達している。自分の在り方を振り返り自己を対象化する姿勢が弱く，加えて高校に通うことの自分なりの意味づけが不確かな点は，中退者に強く見られる意識傾向といえよう。

さらに，「高校外活動積極的」と「自己主張」の組み合わせでは，共に肯定的な回答群において，14.9%と平均を上回る高い中退者率が認められるが，それ以外ではすべて平均以下である。高校外での活動に積極的かつ自己主張の傾向が強い回答群に中退者が多く認められるが，そのいずれかが消極的な回答の場合は，中退者率が低い。つまり「自分のいいたいことは，強く言う方である」に肯定的な意識が，高校外生活への積極的意識と結びつくときに，彼らの少なくない部分は，高校を離れるという方向を取るのではないだろうか。このことは，必ずしも否定的な事実ではなく，「高校生期」の青年が高校以外の生活の場を積極的に見い出す可能性を示すものともいえる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

これまで3点にわたって見てきたように，中退群は自らの理解，評価を，在学する高校での生活と通学の意味に関わらせて捉える傾向が弱く，また自己内省への姿勢が弱い状況にある。彼らの自己主張は，わずかに学校外活動への意欲となって現れているが，それは積極的に学校以外を求めるというよりもむしろ「反学校」としての位置づけに留まっている。中退者にとって，自分の現在と将来の在り方をつなげて考える場として高校が把握されていないだけでなく，替わりの場は現在用意されておらず，自らを位置づけるうえでの確固たる基盤を欠いているのである。

4　総　括

以上，入学後1年以内に退学した生徒の特性を，高校生活に対する意識と自己評価意識の2側面から分析してきた。これまでの検討から，われわれは，結果として中退した生徒の在学中の意識特性を，次のように理解できる。

① 中退者は，高校での学習活動やクラス・クラブ活動に消極的であり，さらに，同校への在籍そのものに否定的な傾向が強い。当該校の生徒であることへの否定的な意識は，高校生として不適切と考えられがちな，アルバイトや異性との交際への積極的姿勢と相関している。

② 中退者は，次のような自己評価をする傾向が見られる。1)持続的な努力・向上への意欲が弱い。2)他者からの自分に対する評価を気にせず，自らも悩む傾向が弱い。3)自己主張する傾向が強く，対人関係にも自信を持っているが，自己に対する満足感は少ない。

③ 中退者にとっての高校は，現在と未来の自己像をそれぞれ描いたうえで，両者を結び付けるための場として理解されていない。つまり，高校に通うことの意味を今の自分の在り方に関わらせて考えず，高校での諸活動を自分の未来と関係づける意識が弱い。したがって，自己主張についてもそれが妥当な自己評価・他者評価を踏まえた自己像に依拠するものではなく，「自我」の発散に留まっていることが予想される。

では，こうした意識特性を持つ中退者の存在を踏まえるとき，学校経営の在り方はいかに構想されうるのだろうか。

第一には，生徒の学校帰属意識と学校での努力・向上への意欲を高めうる教育活動をいかに編成するかである。成績による「輪切り」を経て高校に入学し

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

た生徒は，「底辺校」においてほど勉学に対する姿勢が弱く，このことが学校での活動全般への否定的意識につながっていると考えられる。文字中心の，机に向かう限定的な「勉強スタイル」に適応できない生徒にとって，学校との心理的距離は遠い。彼らにとって学校をより身近なものにするには，学校での諸活動を自分の力を発揮できる場として捉えさせることである。それは，生徒が一方的に教えられるだけでなく，自分達の創意工夫が生かせる場として学校活動が位置づけられることを意味している。

具体例を挙げよう。大阪府下のある高校では，かつて文化祭行事が不活発で，舞台を使った取り組みが何もなく，文化祭のうちの1日は生徒に映画を見せて終わっていたという状況であった。しかし，1986年，87年と2回にわたって，若い教師たちが夜遅くまで練習して演劇を発表し，生徒の評判となった。そして88年に3年生の1クラスが演劇に取り組み，それがとてもおもしろかったことから一挙に演劇発表への機運が盛り上がった。以来，89年に8クラスが発表，90年には13クラスが発表を申し込み，逆に教室展示が減ってしまったという「嬉しい悲鳴」をあげる状況との話を伺った。演劇発表への取り組みの中で，「成績の悪い，『生活指導』生徒が長い台詞を覚えて，発表終了後，泣きだした」こともあったという(13)。同校1年生への悉皆調査（1990年5月）では，「この高校に通うことをほこりに思っている」「高校に行くことが楽しみである」という質問への高い肯定的回答が見られる。このような学校行事への参加の在り方は，特別活動を通じた生徒の学校への意識・意欲を高めうるひとつの方法を示唆しているのではないだろうか。

またこのことは，「問題行動」を防止しようとすることから生じる「管理教育」的学校運営の問題にも連なっている。「『高校生なのだから責任を持ちなさい』という先生が多数いるでしょう。それだったら，もう少し自由がほしいです。私（たち）から規則がきびしいと言われるのは，先生たちが私たちには責任がないからと思っているからです。規則がきびしいのなら中学生と同じ，高校生なのだったらもうすこし自由をあたえられたらいいと思う。責任だけを与えるのは勝っ(ママ)手だと思います」という調査校の生徒の意見は，生徒の積極的活動を可能にする適切な「規則」「校則」を求めている。生徒の自治活動を含めた主体的活動を高校としていかに位置づけるかが改めて問われているのである。

そして第二には，生徒の自己評価意識を多様に形成しうる学校をいかに構想するかである。分析の結果から，中退者においては自己に対する不安や懐疑的

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

意識が相対的に弱いことが明らかである。これは彼らの自信を示すものともいえるが，思春期特有の「自我意識の高揚にともなって生まれる不安を安定させるために」[14]試みられる内省の弱さの現れでもある。こうした「自己内対話」の不十分さは，「記号化された自己自身」としての自己概念の豊かな形成を阻むものとなっている。つまり，「内面化された他者」の存在を通して自己を形成し，これを「自己統制能力」[15]とすることが困難となっているのである。ここで「自己」を「個性」と捉えるならば，「そもそも抽象的な個性というものはどこにも存在しないのであり，個性とは個性を殺すものと個性を殺すものに対して反発するものとのあいだの拮抗関係のなかでかたちづくられるものである。（中略）拮抗関係のなかで児童は，確実に傷つくだろうが，しかし，人間が生きていくということは，あるいは人間の主体形成とは，傷つくこと」[16]ではないだろうか。とりわけ「学校における自己概念の破壊・無力化」[17]が指摘される状況においては，「問題行動をとおしての自己の解体と再編」[18]，それらを通じての思春期統合が高校生期の発達上の課題に位置しており，これらを射程に含めた教育的働きかけが重要と考えられる。生徒の自己形成をこのように考えるとき，学校に求められるのは，生徒に対していたずらに「あるべき人間像」を語ることではなく，彼ら自身によって描かれた自己像へと「駆り立てていく」自己を育てていくことであろう。

しかしながら，こうした経営的条件によっても，高校がある程度の幅を持ってその性格を維持する限り，すべての生徒の高校への「適応」を実現しうるかは疑わしい。なぜなら，消極的な学校への在学を「高卒の学歴と就職のための『手段的適応』」[19]，つまり「逸脱的適応」であるとするならば，高校では実現できない自己実現を目指した「適応的逸脱」の可能性もまた認められるからである。「適応」は他の場面での「逸脱」をも意味しうる。その意味で，広く学校の意義と可能性を展望するには，子どもや青年の学習・発達課題にとっての「学校」，また国民育成にとっての「学校」といった，多元的な学校像をどこまで矛盾なく構造化しうるかを整理することである。このことは，登校拒否や中退といった学校への「不適応」現象の意味を解くひとつの鍵ともなっている。

〔注〕

(1) 蔵原三雪「高校中退者問題の様相」『国民教育』第55号 1983，新海英行・新田照夫「高校中退の現状と課題(1)——愛知の場合を中心に——」『名古屋大学教育学部紀

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

要（教育学科）』第33巻　1986，小林剛『高校中退』有斐閣　1987，金賛汀『「高校」を考える』情報センター出版　1987，西里治『ある証言　高校中退』高文研　1989，和田彰男編著『高校中退の教育法的検討』学事出版　1989，等。

(2) 佐々木賢『学校を疑う』三一書房　1984，中島浩籌『逃げだした教師の学校論』労働経済社　1986，佐藤通雅『生徒――教師の場所』学藝書林　1988，由紀草一・夏木智『学校の現在』大和書房　1989，諏訪哲二『反動的！』JICC出版局　1990，等。

(3) 小林剛　前掲，陣内靖彦・金子養正「大都市工業高校における適応と逸脱に関する事例研究――三カ年の追跡調査報告書」東京学芸大学教育社会学研究室　1981，を参照。

(4) 陣内靖彦・金子養正　前掲，秦政春「高校中退者の発生要因に関する分析」『福岡教育大学紀要』第31号第4分冊　1981，「高校生の退学の実態と問題点に関する研究」千葉県教育センター紀要　第203号　1981，「高校中退問題に関する協議のまとめについて」滋賀県教育委員会　1985，「高校中途退学者の実態と問題点に関する調査研究」静岡県教育研修所　1985，等。

(5) 文部省初等中等教育局『高等学校中退者進路状況等調査報告書――昭和59年公立高等学校全日制課程中退者調査――』（1987年3月）によれば，全国調査において「経済的理由」を挙げた回答は，全体の3.2％である。5頁参照。

(6) 調査全体の詳細は，金子照基・榊原禎宏・植田義幸「高校中退生徒の在学中の意識構造の特質と予防的指導法の開発研究」『マツダ財団報告書』vol.4　1991を参照。

(7) 小林剛　前掲　25頁～26頁。

(8) 自己概念，自己評価意識については，梶田叡一『自己意識の心理学』［第2版］東京大学出版会　1988　82頁以下を参照。

(9) 大阪府下の「進学校」での調査（1989年6月，1年生悉皆）では，これらの項目への肯定的回答率は，いずれも同校が15～25％程度上回っている。『マツダ財団報告書』前掲を参照。

(10) 安彦忠彦『自己評価』図書文化　1987　43頁。

(11) 安彦忠彦　前掲　39頁。

(12) 小林剛は，中退したある生徒について次のように述べている。「彼は自分の非に対する反省の少ない，甘えたキャラクターを十分に持った生徒ですから，一つひとつの自分の汚点を反省し，次の自分の生き方につなげていくことができません。」前掲　109頁。

(13) 1990年11月7日午後，同校を訪問の際に学校長から聴取。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for the Study of Education Adinistration (JASEA)

⑭ 〔思春期の発達的特質〕『現代教育学辞典』労働旬報社　1988　351頁。
⑮ 安彦忠彦　前掲　80頁。
⑯ 久田邦明『教える思想』現代書館　1989　29頁。
⑰ 梶田叡一『子どもの自己概念と教育』東京大学出版会　1985　15頁以下を参照。
⑱ 竹内常一『子どもの自分くずしと自分つくり』東京大学出版会　1987　202頁。
⑲ 陣内靖彦・金子養正　前掲　115頁。

データ処理は，大阪大学大型計算機センター（ACOS 6）において，SPSSXを用いた。

付記：本稿は「高校中退生徒の在学中の意識構造の特質と予防的指導法の開発研究」（研究代表者　金子照基）のテーマで，マツダ財団研究助成の交付を受けて実施された研究の一環をなすものである。なお，統計処理に際しては，植田義幸氏，中村真氏の助言を得た。記して感謝申し上げる。

NII-Electronic Library Service